

FINAL FUCK

ADULT ONLY

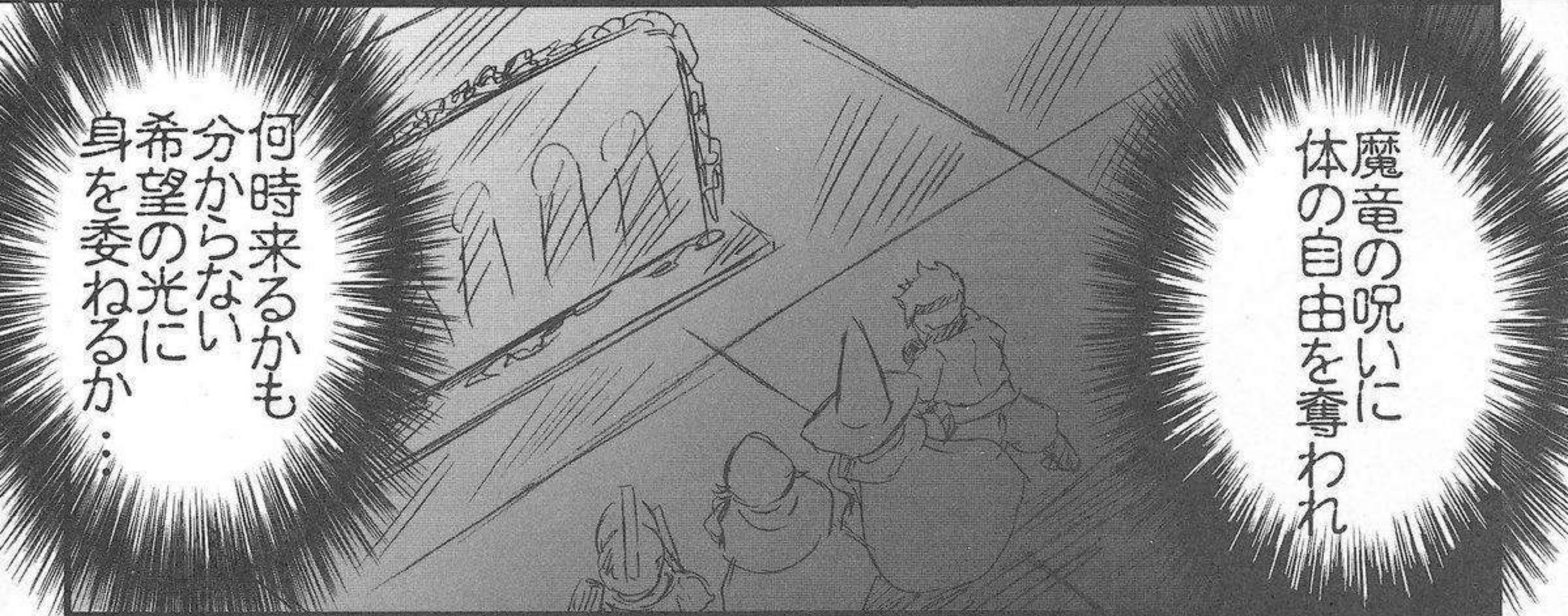




FINAL FUCK



ハハハ!!
こうなってしまうとは
光の戦士も形無し
だな!!



魔竜の呪いに
体の自由を奪われ

何時来るかも
分からない
希望の光に
身を委ねるか…



みんな!?

うわあああああ
あああああ!!!



ドーガも馬鹿
な奴だ：
私が何もせずに
ただ待つとでも
思ったか!!

この…!!



この快樂が
貴様に耐え切れ
るかな…

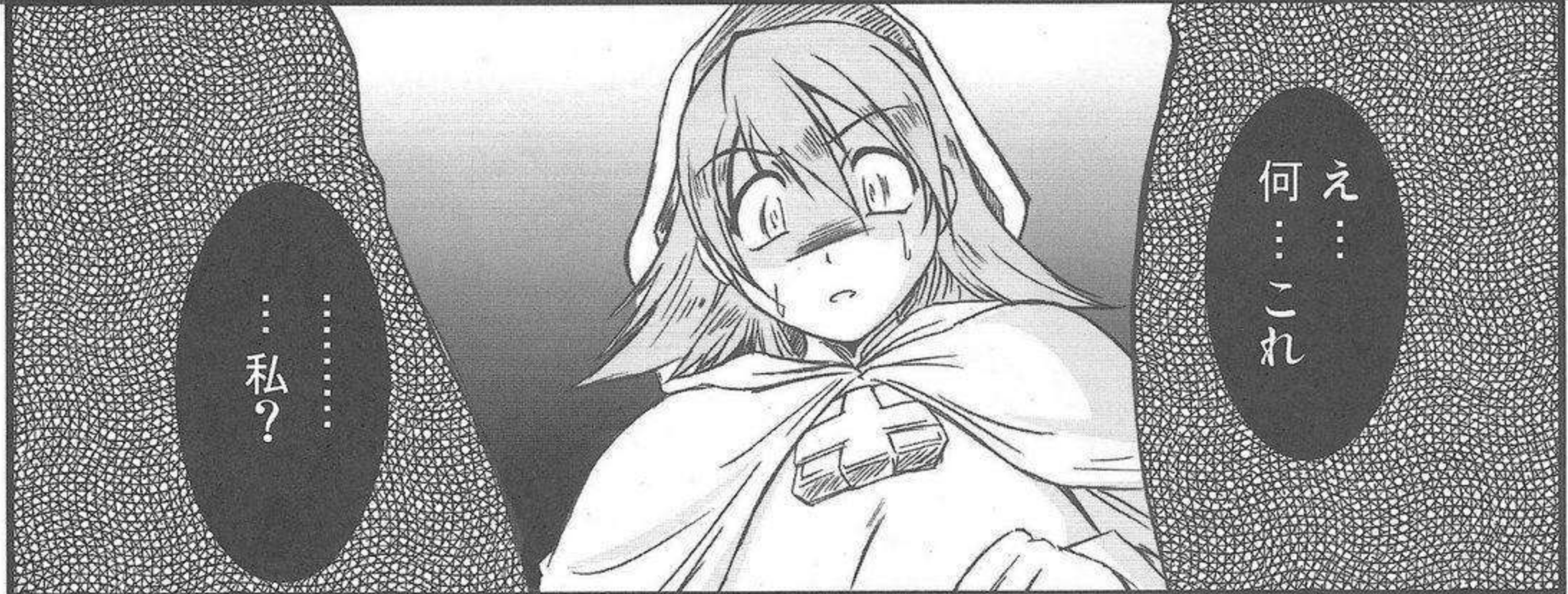
ガ
グ
グ
グ



な…

くく…
このまま貴様達を殺す
のは簡単だが…
それではつまらん…

私が戻るまでの間
貴様を使って楽しませて
もらおうしよう…



私？

え…
何…これ



…私達と一緒に
気持ちよくなる？

モロ

な…



ちよっと…

自分自身に
犯されよがり
狂うがいい!!

んん
んん
!?!ん
ん



抵抗しようとしても
無駄よ……

呪いのせいで体が
動かせないんだから

モロ

やめ…
離して…

んく…

きやああ
ああ!!

ちよっと……
何を……

ひっ



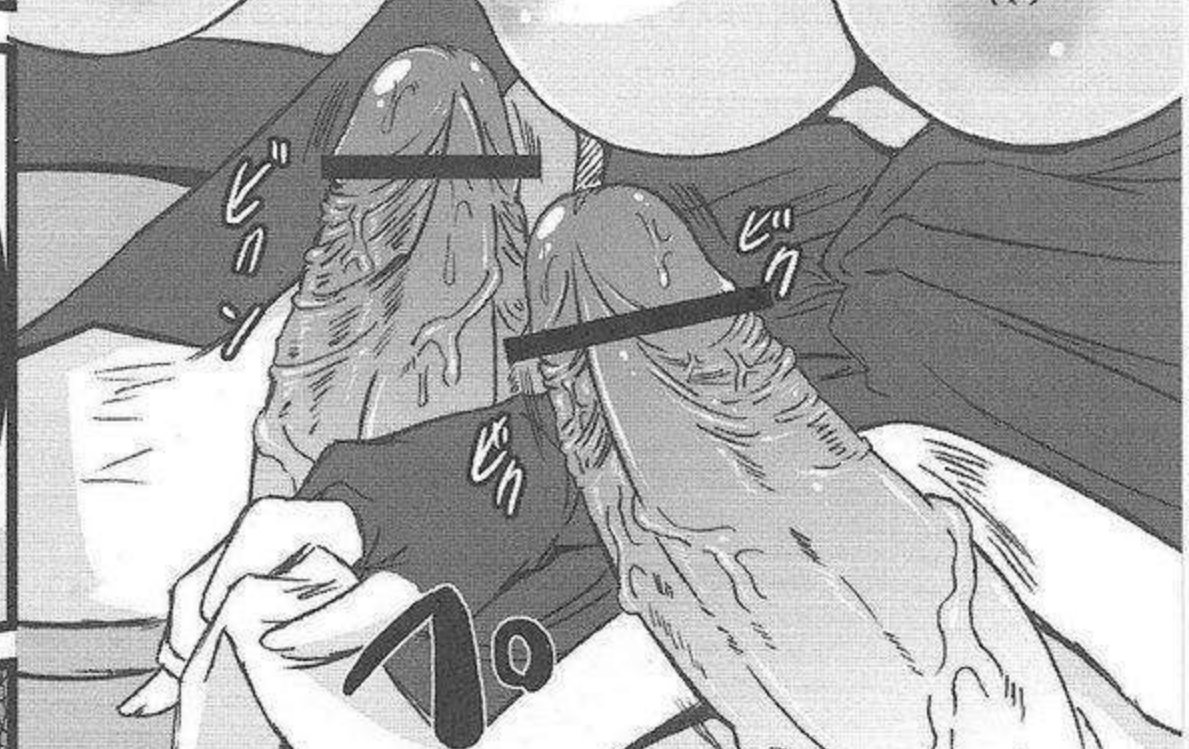
え!?
ちよっと!!
何よそれ!!



さあ…
楽しみましょ…



ふふ…細かい事
気にしちゃうだーめ





どう?
自分自身にマンコ
貫かれてる気分は?

ん...すごい
締め付け...

すぐにイっちゃい
そうよ.....

ふふ...あなたの瞳に
たっぷり注いであげる

いやあ!!

んやあああ
あああああ
あああああ
!!!

んくっ!!

ひあ...

ズルルル...

休む暇は無いわよ
まだまだ後ろが
支えてるんだから...

解放されたいなら
早く助けが来る事を
祈るのね...

ひびく

はひっ

...おひり...
いた...んひい!!

もう...やめ
...んひや!!

んく



ほらほら
ちゃんと口でも
相手しなさいよ

んぐう
んぐう
んぐう

ふぐう



ひやぶ

んじゆ

ふぐ

大分抵抗しなく
なったわね…

そうね…

そろそろ
いいかしら…

ズ…



あなたにも私達と
同じ物を付けて
あげるわ♪



い...っ!?



いやあああ
ああ!!!



大丈夫...
すぐに気に入る
ようになるわ...

ふふふ...
随分立派な物が
生えたじゃない?



ひう!?

じゃあ……一回目は
私がヌいてあげる

う……

何か……ぼ……
きちや……んう

やだ……

んあ





あく

ん!?

ひは

私達が犯し
続けてあげる

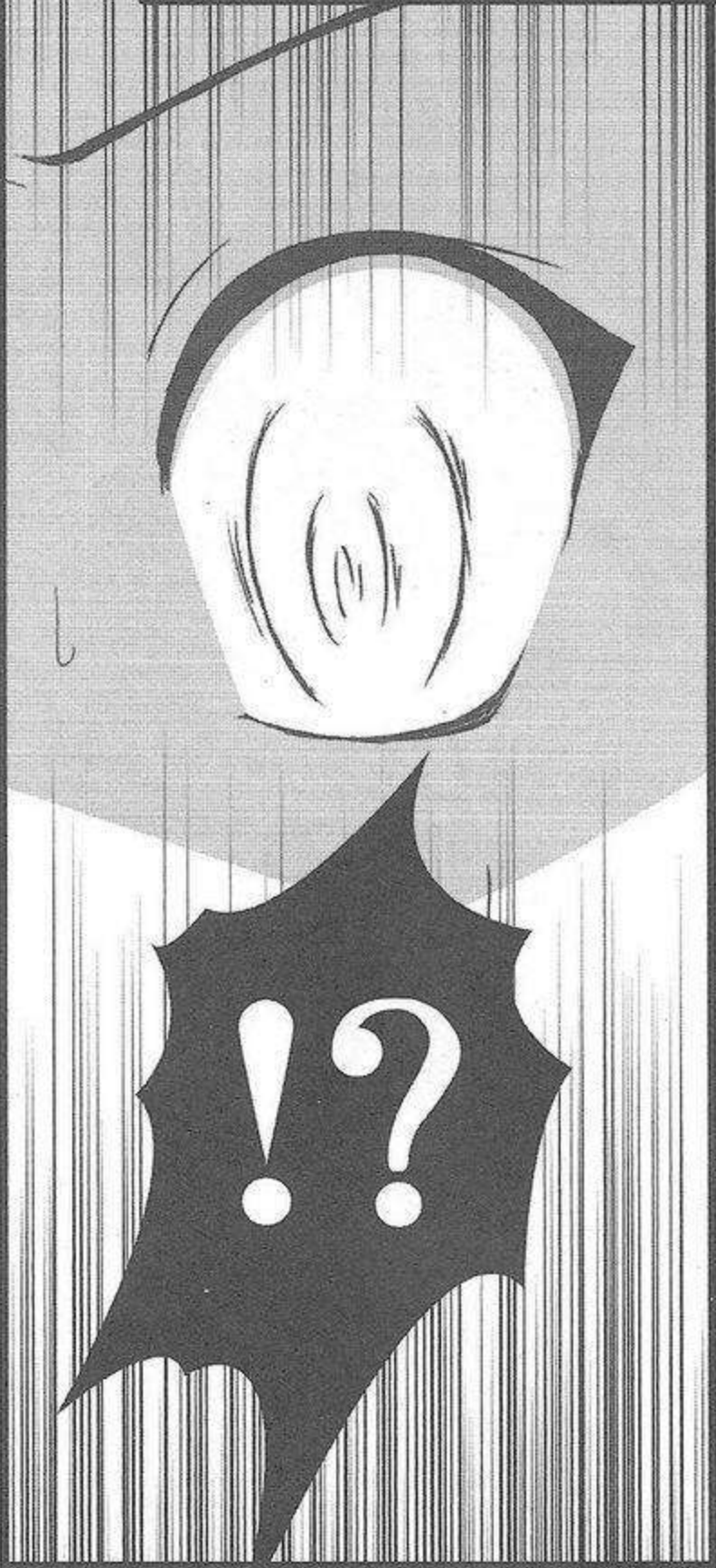
あなたが
壊れるまで



みんな！
大丈夫！！



レフィア！？











「この役立たずめ！」

そんな罵声を浴びせられたのは一度では無かった。

「回数制限があるくせに、お前の魔法と、俺の通常攻撃とダメージが大差無いのは何故なんだぜ？」

「……………」

返す言葉もなかった。

だってそのくらい、魔法が弱かったんですもの。

「……………だからせめて、戦闘外のとこで皆の役に立ってくれるよなあ？ ほら、お前だって、光の子だし？」

——いつからだろう。この行為がはじまったのは。

確かはじめはルーネスが、私が足を引っ張ってるなんて言い出して、それを聞いたイングスが、団体行動だから責任は取らなきゃいけないなんて言い出して、だったらこうしたらどうだろうかなんて、実はムツツリスケベなアルクウが『贖罪の方法』を提案して。

「……………ほら、これじゃぶって」

「んっ——」

ルーネスが、私の口にペニスを押し付ける。

臭い……………。最近野宿が多かったせいで、まともに水洗いされてないペニス。むせるような汗とアンモニアの匂いが、私の鼻をツンと刺した。

「ん……………やっぱりレフィアのお口オマンコは気持ちいいなあ。ほら、休むなよ？」

「んっ……………んくっ、んっ——」

私は必死にルーネスのペニスをしゃぶった。せめて、戦闘以外では怒られないように。

「ルーネスだけじゃなくて俺達も気持ちよくしてくれよ。こっちももうこんなになってるんだから」

膨張しきったイングスとアルクウのペニスが鼻先に突きつけられた。私はルーネスから口を離すと、今度はイングスのソレを口に含み、代わりに左手で

ルーネスのペニスをしごく。右手はアルクウ。

「そうだ。お前は今のくらいでしか役に立てないんだから。そうやってしっかりパーティーに貢献してくれよ？ パーティーは集団行動だからな」

一人は皆のために、皆は一人のために。

だから私は、皆を気持ちよくさせるために、こうやって毎晩『お勤め』を果たさなきゃならない。

皆が気持ちよく、闘えるように。

「俺もう手じゃ我慢出来ないや。入れるぞ」

え……………！？

ルーネスの言葉に驚く。だってまだ、私のあそこは、碌に濡れてなく、準備なんて……………。

「ほらっ！」

「いやあつつつっ！！」

ルーネスが私を激しく後ろから突く。

快楽に飛んでしまいそうな私をあそこ。

「気持ちいいか？ 気持ちいいだろ？」

痛いっ！ 痛いっ！ 痛いっ！

いきなり侵入してきたペニスは、快楽なんてそんなもの微塵も感じさせず、ただ痛みだけを感じて。

「ほら、口も休むな」

そうやってイングスが私の頭を強く前後に動かす。激しいイマラチオ。

「ん……………んぐっ、んあああっ！」

「どうだ？ 気持ちいいか？ 良かったな？ パーティーの役に立てる上、気持ちいいなんて」

いや……………気持ちよくなんて……………何度やっても……………

「だが、もう少し上手くなってもらわないと困るな。サラ姫はもっと上手かったぞ。パイズリもよくやってくれたし」

だって私、あんなに大きなオツパイなんて……………

「しかし、レフィアは本当に締りがいいなあ。もうこうやって何度も犯してるのに、今日だってこんなにっ——」

「犯される天性の才能があるのだろう。もしかしたら、こつそりとマンコにプロテスでもかけているのかもしれない？」

「でもこいつ白魔法使えないじゃん」

「だから役立たずなんだよな」

……………だったら私を導師にジヨブチェンジさせてくれればっ……………

「へへへ……………しかしもし子供が出来ちゃうと、余計に役立たずになっちゃうな」

「それまでに世界を平和にすればいいと思うよ」

「違ういな……………じゃあ、遠慮なく、中に出すしますかね」

いつも遠慮なんてしてないじゃないと、私は心の中で突っ込む。そう、皆は、毎日私に遠慮なんてなく、そのまま、中に——。

「じゃあ、行くぜっ……………」

ルーネスの息遣いと、腰の動きが荒くなる。

「レフィア、レフィア、出るぞ、レフィア」

ルーネスの顔が、快楽に歪む。ああ、来る、と、私は悟った。

「レフィアアアア！」

「うっ」とルーネスが小さい呻き声をあげると同時に、私の中に暖かいソレが満ち溢れる。

「はあ……………はあ……………」

私の中に、なにか暖かい物が満ち溢れていくのを感じた。あたたかい……………なにか。

直後、収まりきらなかったソレが、私の花瓶からコポコポと溢れ出る。

「すげーな。レフィアの中から、俺の放ったフレアが沢山溢れてるよ」

……………薄れいく意識の中、皆の役に立てた達成感を感じながら、私はこんなことを思った。どちらかと言えば、フレアよりも、ホーリーじゃないかと。

（了）

——前回までのあらすじ！

レフィアは困っていた。彼女は、人類類稀なる大いなる性欲の持ち主。だが、表面は一応『ちよつとツン目な強気の普通な女の子』として通っているため、世間体を壊してまでセックスに走ることが出来なかった（家にいる時は親父とやっていた！レフィアの養父であるタカは、伝説のAV男優の前世だったのだ！）。このままでは、セックスのことで頭がいっぱいになって、おかしくなってしまう！

……そんな時、彼女はある名案を思いついた。

「ねえアルクウ。子供をつくるためにはどうすればいい？」

レフィアは突然パンツを脱ぐと、近くにあった椅子に腰をかけ、学校の先生が黒板を指す時に使う『アレ』で自分の陰部を示しつつ、そう質問した。

「えっと……レフィア、これってどういうことかな……？」

彼女が目をつけたのは、気の弱そうなアルクウだった。肉体関係に発展したらうざくなりそうなルーネス。無駄に紳士な姿勢に腹立たしいイングス。その二人と違ってコイツだったら、私の望むような言いなりになるに違いない。レフィアはそう考えたのだ。

「アルクウに必要な知識だからよ。だってアルクウ、童貞でしょ？」

「え……？　なんでそんなこと……」

「童貞なのどうなの！？　私は真面目に質問してるのよ……」

レフィアは強い言葉でアルクウを威嚇した。まるで、『嘘をついたらどうなってるかわかってるだろうなっ』と威嚇する、警察のようだった。

「あ………は、はい、そうです」

「でしょ？　困ったものよ。今から魔王と闘おうっていう光の子が童貞なんてね。『童貞で許されるのは玉葱剣士までよねー！』って魔王が笑う姿が目に見えかぶわ」

「……………」

「ね、だから私はアルクウのためを思って授業してあげてるの。だから質問に答えて」

そう言って、レフィアはアルクウに表向きは真摯な眼差しを向ける。獲物を捕らえた、詐欺師のよう

に。

「えっと……それは……そこに、ペニスを……」

アルクウは口籠る。

「お前は小学生か。ペニスをどうするの」

「えっと……入れれば」

「そう、ペニスを入れればいいのよ！　ここに！　でもね、いきなり入れるのは間違いよ？」

「え……？」

「まずはね、男の人がここを弄って、気持ちよく

させてあげなきゃいけないの」

「気持ち……良く？」

「そう、ほらここをね——こうやって」

レフィアはアルクウの手を掴むと、それを自分の陰部に押し当てた。

「指を中に入れて」

「え………あ、はい」

言われるがままに、アルクウは指を入れる。

「それでね……そこを弄るのよ、思いつきり」

「こ………こうですか？」

アルクウの指がレフィアの中をかきまわす。

「そう、そうよ。その上手さで男の価値の半分

くらいは決まるの。頻繁にやって手の熟練度を上げて、ヒット数を稼ぐことをお勧めするわ。ほら、もっと激しく、激しくいじって！」

「え………あ、はい……」

アルクウの指の動きが激しくなる。

「んっ………はあ、たまんない、たまんないわよアルクウ。指だけじゃ我慢ならないわ。ほら、ここ舐めて。犬みたいに舐めて！　お前は犬よ！」

「え………あっ——」

アルクウは、レフィアの両手にガツシリと頭を掴まれると、そのまま陰部に押し付けられた。

「んっ………どう？　あたしのお●んこ、美味しいかしら？」

「ん——んはっ——」

必死に頭を縦に動かすアルクウ。

「そう。いい子よ。そのまま舐めて、わたしを気持ちよくして頂戴——んっ！」

アルクウが愛撫を繰り返す。ペロペロと、余すこ

となく、レフィアの身体に舌を這わせた。

「んっ………はあっ………いいわっ、じゃあそろそろ

……、入れましょうか」

レフィアはアルクウを開放すると、椅子から下り、

四つんばいになって尻をアルクウに向けた。

「セックスをするにあたってね、相手の好きな体

位を知ること大切よ。私はね、普通よりもこっち

の方が好きなの。知ってる？　この体位」

アルクウはその問いに、小さく頭を縦に振る。そ

う、アルクウは知っていた。この体位は、まさしく

「来て、来て、アルクウ！　激しく突いてっ！」

——バックアタックだ！

(了)

ARTS BY MOKI





「ちよつと、なにするのよ！ やめて！」

昨晚降った雨のせい、土はとて硬かった。地に叩きつけられた華奢な身体に、鋭い痛みが走る。

「ちよつと——ちよつと、いやあ、助けて！ ルーネス！ イングス！ アルクウ！」

「ゴブ……」

まさかの全滅だった。ゴブリンを相手に繰り返して盾を構え、戦闘の熟練度を蓄積していたそんな折……：相手がゴブリンだからまだいける、まだいけると休憩もせずに闘い続けた果てに……ルーネス達は戦闘不能に陥ってしまったのだ。たった一人、瀕死のレフィアを残して。

「良くも遊んでくれたゴブな」

「きやあッ！」

捲り上げられた服から、豊富な胸がこぼれるように曝け出される。レフィアははじめこれを守ろうとしたが、ゴブリンの手が下の下着をずり下ろすと、咄嗟にそちらに手がのびる。秘部を守るように覆う、レフィアの手。

「これはいい眺めゴブねえ。さつきまで散々舐めてかかっていたゴブリンに、ここまでやられちゃう気分はどうゴブか？」

たった一体のゴブリンに自由を奪われ、完膚なきまでの屈辱がレフィアの心を打ちのめす。それは憎しみや悲しみと言った類の負の感情。……であったが、

（く、悔しい。でも……）

だがしかし、今レフィアに、それらを越えた別の感情が芽生えようとしていた。

（この恥ずかしさが……なんだか……）

つまり、快楽。

つまり、悦楽。

横には戦闘不能状態になったパーティーメンバーが横たわっていた。それらを確認する度、より羞恥心に煽られ、身体が熱く火照りだしてしまう。

「ほら、その手をどけるゴブよ！」

「ひやあッ！」

陰部を覆い隠す手をどけられ、ゴブリンに指を入れられるレフィア。

「まだ何もしてないのにえらいトロトロしてるゴブねえ。ひよつとしてひよつとすると、こんな状況に感じてるゴブか？」

「いや……そ、そんな……んうっ！」

ゴツゴツとしたゴブリンの指が、レフィアの蕾に侵入した。クチュッと小さな音を立てると同時に、中からトロリと蜜が溢れ落ちる。

「こりやあ締め付けの強いおま●こゴブな。俺の指がギュギュって圧迫されてるゴブ」

「んあッ……ん、はあッ、んあッ……そんなこと……な……んっ……」

レフィアは必死に反論しようとするが、ゴブリンの指の動きに邪魔される。

「しかもまだ綺麗なピンク色ゴブね。もしかして初めてだったゴブか？」

「いや……あたし……」

「初めてでこんなにイヤらしい汁を垂らしながら、感じているゴブか？」

「あ、いや……あッ……」

ゴブリンの手が胸にも伸び、乳首をクリクリと弄りまわす。

「あッ、んっ、いやっ、だからっ、んっ、くあ」

「へへへ……」いつはいつかいるゴブ。戦闘に勝てた試しなんてないゴブから、人間の処女なんて初めてゴブ。楽しむゴブ」

「あ……いや、ちよつと、入れちゃ……」

レフィアは必死に抵抗しようとするが、すぐにゴブリンに抑えつけられてしまい、どうしようも出来

ない。

「気持ち良くしてあげるゴブから、暴れるんじゃないゴブ」

「んあああああああああああああああ……」

森中に響き渡るかのような絶叫。

「へへ、人間の雌はいい声で泣くゴブね」

「いや、やめ……ひやあッ！ 大きい、大きくてそんなの、壊れちゃうからあ！」

いつか愛しいあの人のためにと取っておいたレフィアの純血が、ゴブリンの巨大ないちもつによって汚される。ゴブリンのペニス、人間のソレに比べ、かなり大きかった。

「大丈夫、すぐ慣れるゴブ。慣れた後は、人間のペニスなんて物足りなくなるゴブよ」

「いや、そんなのやめて……んあああ！」

意識が飛んでしまいそうほどの痛み。気付けばあそこからは、破瓜の証である赤が、どくどくと流れていた。

「途中で失神するんじゃないゴブよ？ ほらっ」

「ひぎいっ……」

先程よりも、強く、激しく、腰を打ち付けられる。

「んあッ、もうっ、やめてっ、やめてっ、お願い、お願いだから……」

「バグ技使用のため、ポーションゲット目的で乱獲されたあの日のこと、俺は忘れないゴブよ」

「いや、それ、私達の世代じゃ……んあッ！」

「ポーションゲットの為に虐殺されるような雑魚に犯されてる自分を悔やむといいゴブよ！」

思わず涙を零してしまうレフィア。

（く、悔しい……でも）

『く、悔しい……でも』は、もはや闘う女の子が登場するエロ漫画の、定型句となりつつあった。

■このゲームを作ったシェフは誰だあああああつ!!



田中弘道さんのゲームが好きです

コマイズム <http://wsplus.sakura.ne.jp/> ワスプラス



後書き

はじめまして or お久しぶりです。オオハシです。

さて、いかがでしたでしょうか？今回のFF3本。
お気に召していただけたのなら幸いです。

FC版を子供の頃にやった思い出もあり、ネーム段階では色々考えてたんですけど…

蓋を開けてみたら相変わらずチンコだらけの汚い本になってしまいました
とさ。ザーメン。

まあ、よかですよかです。ぼかあ、チン娘大好きですから。

それはそうと…

レフィアエロイっすね～。

サラ姫もたまんないっすね～。

エリアを見てるとなんかこう…オヂサンの縦笛もピーンと…

あ…ごめん引かないで。

しかし…今回の本はサラ姫とエリアの資料が手元になかったせいで全然描けなかったのもし次回出す機会があればこの2人メインで描いていきたいです。

あと、今回描けなかった（描き忘れてた）導師とかも絡めていきたいですね。

まあ、こんな事描いときながらFF3途中放棄で某エロバレーばっかやってたんですけどね!!!

…………ごめんなさい、暇見てちゃんとクリアします。

最後に、この本を手にとって頂いた皆様、お忙しい中ゲストを描いてくださった、にくばなれさん、MAKIさん、yasuさん、WSPlusさん
本当にありがとうございました！

ではでは！また次の本でお会いしましょう！！



2006.12 オオハシ

奥付

平成18年12月31日発行

製作

Team-CAF

漫画

オオハシ

SS

いのしん

ゲスト

にきばなれさん

MAKIさん

yasuさん

WSPiusさん

印刷所

わこのしっほ様